

丈人力のススメ

「人生九〇年時代」をこう生きる

堀内 正範 著

元『知恵蔵』編集長

堀内正範著

『丈人のススメ 日本型高齢社会 「平和団塊」が国
難を救う』（武田ランダムハウスジャパン刊・二
〇一〇年刊）

◎目次

第一章 世相 「現役人生六五年」をすこし終えて

第二章 家族 「マイホーム・パパとママ」の憂鬱

第三章 モノ・職場 途上国産の中級品に囲まれて

第四章 和風回帰 四季と特性が息づく地域に

第五章 高齢期・居場所 「エイジング・イン・プレイス」

第六章 高齢者 ひとりの住民・国際人として

第七章 新時代 「人生九〇年時代」をこう生きる

「丈人」Ⅱ 「三世代多重型社会」を達成する「支える

側」の高齢者。現役シニア。老人であり丈人である。

「丈人力」Ⅱ 丈人層が保持する生活力、生命力。大丈

夫！の気概。人生の夢を深化・発展させる力。

「平和団塊」Ⅱ 平和の証としての「日本高齢社会」達

成の中心になる戦後（一九四六～五〇年）生まれ一〇

〇〇万人の若き高齢者層。戦後っ子。

25x17 2013.11.01 稿

第二章 家族

「マイホーム。パパとママ」の憂鬱

「マイホーム。パパとママ」の憂鬱

*アノヒトとかヒカフビてる人といわれて

マイホーム、耳にすると心安まる、なんともいえず響きのいいことばである。これほどまでに生活感を内包しえたカタカナ語を、他に探すのはむずかしい。

いま高齢者となっている人びとがそれぞれの人生をかけて、二〇世紀後半の五〇年の間にその内容をつくった日本語なのである。だから細部の意味合いは個人によって異なる。

ひよわなもの、よき（良き、好き、善き）ものを守る城として、「マイホーム」は先行の「わが家」や「家庭」などとともに、それに負けない温もりを日本語として持つに至っている。そのぶん「ホームレス」ということば

がわびしさを伝えてくる。

戦後っ子だったパパとママは「マイホーム主義」と先輩からかわれながらも、狭い団地の2DKに身を寄せ合って暮らし、必死に働いて、ふたりの子どもを育ててきたのだった。

夫婦と子どもふたりの家庭が都市型住民の典型となり、「核家族」と呼ばれ、「標準家庭」ともなった。

その後、職場までは遠くなっても、マイホーム・パパとママは、子どもたちそれぞれに一部屋をと考えて、団地からさらに郊外のプレハブ一戸建ての3LDKに引越した。そういう体験をもつ人びとは少なくないだろう。それが「しあわせ家族」だったのである。

人生のはるか遠い地点までを見透かして、可能なかぎりの費用を工面してマイホームを獲得し、いまそのころ見据えていた地点の近くに高齢者として立っている。定年後まで残る住宅ローンを思い、長くもあり短くもあつた来し方を顧み、マイホームの当主としての存在感を確

かめるために、じつくりわが家の中を見直してみよう。

家族の希望をかなえることを優先して、そのぶんみずからの希望を抑えてきた結果、不相应な応接セットや家具といった家族共用品はあっても、みずから求めた専用品というのは少なく、「モノと場」に表わされる当主の存在感が意外に希薄なのに気づくであろう。

そこでここでは夫婦と子どもふたりの核家族、Fさんのマイホームを覗いてみることにしたい。

娘と息子が「パラサイト・シングル」（寄生独身者）をきめこんで、親元から出て行かない家庭。サッカートのイーローカード一枚ずつといった子どもを持つ「団塊シニア」であるFさん。

上の娘は短大を出てからフリーター暮らし。かせぎはほとんど衣装と旅行に消えている気配。下の息子はごく普通の大学をごく普通に卒業して、親のひいき目でもしつかりしてきたように見えるのだが、就職試験を受けて勤めはじめた有名輸送会社だったのに、短期でやめてし

まって家にいる。大学を出たのだからと自主性にまかせているが、というより言っても聞かないから気ままにさせているが、同じ経緯をもつ友だちとパソコンやケイタイで情報のやりとりをして過ごしている。

時折り出かけて「職さがし」をしているというものの、「ニート化」（NEET。働くつもりのない若年無業者）への気配もただよう。

娘や息子の話を聞くともなく聞いていると、両親と同じ高齢者のことを「ヒカラビてる人」とか「ヨボヨボジジババ」といつていることがある。時には父親に対して「アノヒト」、母親に面とむかって「キミ、元氣かね？」と呼ぶなど、軽くあしらわれていると感じることがたびたびある。

「この家はわたしが名義人なのだ」などというのも愚かしい。壁面に娘が貼った「のりか」（藤原紀香）のポスターほどには、底値までさがった土地の築二〇年余という家の壁に存在感があるわけではない。

「ヒツペガシ娘 v s ツカエナイ親父」

*「ツカエナイ親父」とはなんだ

「塩づけにできる資産などどこにもありはしないし、いまでさえわが家では子どもたち、とくに娘によつて強奪に近い形でヒツペガシ（資産移譲）が行われている」とFさん。

二二五〇万円余が高齢者の平均貯蓄額で、暮らし向きに心配のない人が半数を超える？ そんな調査を同居の娘と息子をもつFさんは「信じられない」という。

女性がこれからの国の経済、社会の担い手になるのはいいのだが、どれほどの若い女性が自分の実力（かせぎ）で暮らしているのだろうか、ローライズ・パンツ（体型ギリギリのヘソ出し衣装）からいそいそとデオールのパーティー・ドレスに着替えて、自在に「変衣変性」する娘の姿をみながら、際限なしの「女性化」に懸念を

もっているのである。親の育て方がどうこうではなく、風潮なのだからとやかくいっても仕方がない。

「時代の花」として娘たちを擁護し、女性の活力に期待する立場からは無条件に、両親や祖父母の「六つの財布」からうまくせしめるのも実力のうちとする意見もあり、何より娘たちは必要に応じた家庭内ヒツペガシは当然のことと考えている。

「男女格差報告」（ダボス会議発表。二〇一三年）では一〇〇位以下という外国にくらべた女性活用の低位置が話題になる。経団連も同友会も、女性の登用を「ダイバーシティ（多様性）の推進」としてすすめる。

さらに女性に活躍の場をという「女性の活躍促進による経済活性化」行動計画（働く「なでしこ」大作戦）が、昨年六月に、野田内閣の関係閣僚会議で決定された。小宮山（洋子）大臣も乗り気の事業であった。

そして安倍総理までが、国連総会の演説で女性重視を打ち出している。

女に生まれてよかった。笑顔で「おもてなし」といえば、なんでも可という世相なのである。テレビ画面は、すではしゃぎまわる女性たちで占められている。

人並みに応じられないと、「ツカエナイ親父！」としてあしらわれる。お前こそ「ツカエナイ娘」といい返せないところがつらい。Fさんばかりか、うかうかしていると心優しい高齢者が居る場所もない、おカネもないになりかねないのである。

新世紀になって、若い女性やIT青年たちとともに強く輝いているはずだった高齢者が、居場所すらなくなるとは何たる仕打ち！

職場ではIT音痴と軽視され、売れ筋ヤング製品の現場からはざされ、はてはリストラの対象となる。「ハローワーク」（公共職業安定所）の窓口の混雑ぶりや、上野公園や新宿などで見た「ホームレス」用の青テントの群れや炊き出しに集まっていた人びとを思うたびに、Fさんには、戦後すぐころの「ふりだし」へと戻って行くよう

に思えてくる。「逆風行舟」である。

いったいだれが振った賽の目が悪かったのか。

「家庭内ホームレス」

*居場所は図書館・ファミレス・パチンコ屋

何としたことか、わが家において、「ホームレス」とさほど遠くないわびしさを感じている戦後ツ子。パパが増えていくという。パパが過ごすのにふさわしいステージが家庭内からなくなりつつある。というよりなかったからである。

テレビのチャンネル権はない。というより見るに値する番組がない。クルマは一台しかないから行く先が違えば使えない。というより子どものようにあちこち行く場所がない。しかし車検・整備・ガソリン・JAFまですべて親持ちである。食事は洋風が多くなった。うどんよりスパゲッティ。自分では作りようがないから仕方がな

い。つまり「ステージ」がない状態は深まりつつある。

聞けばどれも同様で、家に居場所がなくなつて「家庭内ホームレス」になる。といつて屋外で長時間をすごせる居場所は限られていて、二四時間営業のファミレスかせいぜい公共図書館かパチンコ屋の休憩室くらい。

「ステージレス」である原因は、自分たちにもあるが社会のしくみにあるとは判つていても、どうしたらいいのかわからない。

このまま推移しては、高齢者のだれもが不安なく暮らせる「高齢社会」へ、少なくともそこへ向かつていけると感じられる暮らしは、招き寄せようもない。

「MY:がないマイホーム」

*わがブランド品はオメガの時計だけ

Fさんは改めてじっくりわが家の中を見直して見る。

本だなの本が動いていない。家具はどれも一〇年以上

まえに購入したもののばかり。前世紀のものだ。

一方、暮らしの表面を流れていく日用品は百均やスーパーものが多くなつた。シャツはユニクロかアジア途上国製品である。妻や娘の持ち物のなかには先進国製ブランド品もあつて、ルイ・ヴィトン (LOUIS VUITTON バッグ) やプラダ (PRADA バッグ) やディオール (Dior 服装品) やシャネル (CHANEL 化粧品) などといったものはFさんにもわかる。スーパー品とのアンバランスさに父親であり夫である自分への無言の不満が隠されているように思える。

Fさんのブランド品といえるものは、後にも先にもオメガ (OMEGA 終わりの意) の腕時計だけ。家族のためを優先してきたことでの専用品の希薄さは、みずからのために生きることへの自負の欠落ではないか。家庭内に自立した存在としての拠点がない。

「マイホーム」のために努めてきたはずなのに、と思うのはFさんのほうの都合であつて、最も優遇されている

仲間を比較の基準とするジュニア側は、そうは思っていないのである。

「ツカエナイ親！」として、おおかたは現状に不満なのである。

両親に対する不満との葛藤を行動のエネルギーにしている子どもたちの体内に蓄積された「荒廃菌」のありようを、つまりわが子の「潜在的ワル度」をFさんはつかめていない。

タブロイド版夕刊紙がふりまいた「悪を暴く記事」によって家庭内にもちこまれた「荒廃菌」が、抗体のない子どもたちに取り込まれて、いまや胸中をうようよ泳いでいるのだ。そこから発せられる配慮のないナマのことで、家族にはない他者の悪意が混じる。

当主として当然のこととしてきた家族への配慮が、「人生の第三ステージ」にはいった自分を支える磁場の不在となっていることに、Fさんは危機感を覚える。

マイホームに「MY・・」がない。では「新宿ホーム

レス」とどこが違うというのか。

高齢者の自立のためには、存在感を同居人にきちっと示すような家庭内の拠点が必要なのだ。そのための専用スペースとモノの確保。

といって、夫婦と子ども二人で最低居住水準をぎりぎりクリアしている「3LDK」の住まいだから、当主として一部屋なんて余裕はない。子どもたちが親ばなれをせずにいるから、それぞれに一部屋、それに夫婦の一部屋である。

部屋の確保を謀って追い出し（子どもの自立）を試みても、獲得に失敗した末に孤立してしまうようでは、拠点どころか「家庭内ホームレス」の確認になってしまう。

となると共用スペースであるリビング・ルームの二画。要はたとえ不在であつても当主の存在感をきちっと示せるようなコア（核）をつくることにある。

「家庭内リストラ（高齢化）」なのだから、させるのではなく、黙って自らするものである。たとえ不在であつて

も、当主の存在感を示せるような「当主不在の在」としての「わたしのもの、MY・」の形成。

いまリビング・ルームを見渡しても、何もかもがそうであるようでそうでない。おおかたは共用品なのだ。

六〇歳すぎではじめる「家庭内リストラ」は、これまでそういう意図がなかったのだから、際立って「わたしのモノ」といえるものなどないのが当たり前。

傍らにあつてこれからのわが高齢期人生を輝かせてくれる「高齢化用品」を意識して身のまわりに配置することにしよう。

蓄えてきた知識や積んできた経験をさらに深化・発展させることに資する「わたしのモノ」を、いつでも利用できる状態に置いておく。後になると述べるが、それらの知識や経験は、地域社会への参加にかかわるだいたい「個人資産」になる。身近にあつて「わたしのモノ」といった役割を担えればいいのだから、高価なブランド品である必要はない。日ごろから愛用しており、「わたしの

モノ」という存在感があればいい。

これと決めた「わたしのモノ」を基点にして「家庭内リストラ」をすすめる。長い高齢期の住環境を整えようというのである。

まずはひと昔前まではNO・1の愛用品であり必需品であった机と文具類。いまやインターネットとEメールの時代だから、卓上パソコンと周辺機器に主役を奪われて久しく脇役に耐えてきた。これからは「人生第三期」の活動を支える「高齢化用品」の基点として、馴染んだ机は新たな「高齢者意識の据え置き場所」として確保して活かすことになる。

「家庭内高齢化コア用品」

*「マイ・チェア」の即座の効用

「団塊シニア」のひとり、Fさんには親ゆずりの骨董品など何もない。リビング・ルームを見直した末に、小さ

な庭と室内の双方が見渡せる窓際に、高齢者特別席「SSスリーエスシニア・スペシャル・シート」を据えることにした。

会社でも窓際だったし家でも窓際でいいと、居心地を合わせることにして。そして文字盤が気に入っている置き時計をサイドボードの隅に、旅先で入手したパピルスに画いた「狩猟図」を壁面に飾ることにした。

Fさんの「SS（シニア・スペシャル）シート」は、高齢化時代を表現する「コア（核）用品」として、含みのあるいい選択のようである。重量感より意匠センスより何よりも座り心地を優先する。いくなればわが家の「玉座」「師子座」「座禅座」である。

かつてインドでシャカムニが宝樹の下に座して思惟したように、わが人生の来し方と行く末を半跏思惟する座を自選するのだから、「マイ・チェア」として大切に扱うことにしよう。

すでに愛用のイスをお持ちのみなさんは「マイ・チェア」と呼んでください。座して高齢期人生の今日から明日へを静かに思惟する「半跏思惟丈人」となる。

「人間は誰しも『私の椅子』と呼べるような椅子を持つ必要がある、そうやって初めて自宅で本当に落ち着いた気分を味わえるのではないか」というのは、マイホームを建てたときから気にかけていた建築家の提言で、まことにその通りと思っても、ローンをいっぱい組み込んだFさんには、そこまでの「自己実現」の余裕はなかった。家族思いの当主としてはそこまで自己主張をしなかった。いまその実現の時なのだ。

先長い高齢期を通じて愛着をこめて使い込むことによって座り心地を熟成させてゆく「マイ・チェア」。

即座の効用としては家庭内に存在をアピールする磁場となる「高齢化コア（核）用品」として、格別の思いを込めてそれなりの費用を投じた「特別席SSシート」を、家中でもっとも居心地のよい場所に据えることになる。

一日のしごとを終えて、「やれやれ」と腰を落とし、心

を静めてひとしきり一日をふりかえる。「さて」と気を改めて明日を思い、「よし」と意を決して立ち上がる。それでいい。それが「マイ・チェア」の即座の効用なのだ。どっしりと座って、からだの重みとともに来し方への充足感と行く末への待望感を委ねる。時には座して陶然として、すべてを忘れる「坐忘」の境地にもひたれる。それなくして何の人生か。

「モノ同士のモノ語り」

* 専用用品をつなぐ暮らしの動線

静かに「家庭内リストラ」が動き出す。そのうちに同居人が「パパのもの」として気づくだろうが。

候補はいろいろ。

デジタル化で実用性を失ったが、シャッター音と手触りの感触には変わりがない高級一眼カメラ、部品の揃わないオーディオといった愛用機器の類。楽器。それにあ

ちらこちらに散在していたのを、全員集合！をかけてあつめた一二〇冊ほどの愛読書。手元に置いておきたい本はこんなものだ。

碁・将棋盤やゴルフ・釣り具セット。手仕事に感じ入っていた碗・皿・硯。明かり、時計、置物などのアンティーク（西洋古美術品）。

日ごろ忘れがちな彫刻や絵画。造形や色彩が精細な貝や蝶。さらには地球儀、船・飛行機・汽車・車のミニチュア。素朴な木製アフロ・グッズ・・・。

どれもお気に入りの「わたしのモノ」であり「高齢化コア用品」の候補だが、常時は多くはいらぬ。その中から五く七点を納得して選び出して、活動の基点になる机と椅子のまわりや動いて見える範囲に置き場所を決めればいいことだ。

家庭内に「高齢期のステージ」が立ち上がる。

意外に地球儀なんかがおもしろそうだ。東アジアの隅にある島国ではなく、太平洋リング（大洋弧）の一角

にありながら、経済や文化の上で大きな貢献をして輝いている「海洋国」であることを宇宙飛行士の視点で納得することができる。アジア大陸の「小日本（シャオ・リベン）」であるとともに、広義の意味でのオセアニアの「海洋大国」としての多重性を活かすことができそうだが、手にいれるのは困難な貴重種だそうだが、蝶の皇帝といわれる一頭の「テングアゲハ」なんかなら、華麗に舞う姿を思うだけで気分は晴れる。胡蝶に同化してひらひらと舞ったという壮年の莊子の「胡蝶の夢」は、味わって損はない。

旨し「天の美祿」(酒)をとくとくと注ぐ「しりふくら」(徳利。掌の上でのぬくもりはなまめかしい)でもいい。
親ゆずりの高価な骨董品などがあれば、さりげなく実用にして活かす。高齢期の願望を仮想空間に委ねる「わたしのモノ」だから候補はいくらでもある。なければこれといったモノを探し出すこととなる。

季節(機会・気分)に応じて差し替えるのが「季節小

物」。わが家のリビングに四季折り折りの「モノ同士のモノ語り」がはじまることになる。

後の項でくわしく述べるが、こうしていくつかの「高齢化コア(核)用品」とそれをめぐるいくつもの「わたしのモノ」(高齢化専用用品)を、家内の女性ものの応援をえて、あちらこちらに配することで、存在感が希薄であった時に比べれば、パパとママのありようを伝えるしかけが見えてくる。

はじめは気づかなかった同居人は、「パパのチェア」や壁面飾りや日用品に示される「家庭内高齢化」の意図に少しずつ関心を強める。それでいい。

モノの「家庭内高齢化」拠点の成立は、親子語りのはじまりを意味するもの。

外へ出て優れたボランティア活動をしていても、わが家の中に高齢者としての存在感がないようでは、ほんとうに優れた活動家とはいえない。

「家庭内リストラ戦略」

*「三世代ステージ化」をすすめる

家庭内の「わたしのモノ」である「高齢化コア用品」として、「マイ・チェア」を推奨したが、高齢期の自己目標に立ちむかう能力を支えてくれる愛用品でありさえすれば何でもいい。

とはいえ、傍らにおいて生涯にわたって愛用していく「コア（核）用品」となれば、数年でモデルチェンジするような消耗品では役不足。だから日新月异で変化する電化製品や車などは高価であっても評価が成り立ちづらい。といって「千年杉」を細工した違い棚のような鮮やかな年代主張はなくともいい。

どうだろう、ここでの「高齢化コア用品」というのは、六〇歳から終生あるいはもう少し先まで考慮した「超人生耐久品」（遺産として残るほど）といったものとして、およそ三〇年利用というあたりをメドとしよう。「高齢

化」の意味合いは広く「長年化」「優良化」でもあって、だから高齢者だけが利用するという狭い意味ではない。長年愛用する優れた日用品といったところ。

家の中を眺めてのとおり、オープン・スペースに置かれているのは多くは家族共用の家具つまり「三代ミックス」型用品である。そのうちでも花器や草花の鉢植えや観葉植物や床の間の軸といった季節の気配を屋内に取り込む用品・用具は「家庭内高齢化」にはほどよい素材である。高級家具はそろっていても、季節の気配が動かないリビング・ルームや客間なら「高齢化ゼロ！」としての評価を下しておこう。

みずからのモノによる「家庭内リストラ」を主として述べてきたが、家族構成にもよるが、「三世代同居」のお宅だと、青少年、中年、高年の三世代が暮らすわけだから、共有するものとともに、それぞれが優先的に専用する「三つのステージ化」が課題になる。

これまでの家族共用品はそのままとして、同居人それ

ぞれの生活動線を考慮しよう。同居人から生活の自由を奪うものでないことが理解されないと先に進めない。

ここではわが家に親しい友人を迎えいれるような興奮を与えてくれる「高齢化用品」を創り出してくれるにちがいないIさんのような各地各界の熟年技術者のみなさんに熱いエールを送ってから先にいくとしよう。

「幸せ家族の孫育て」

* 近居より同居が未来型

ここではむ六〇歳代の「還暦期」よりやや高齢の「古希期」にある人のお宅の場合を見てみよう。

すでに哀樂をともにして暮らした子どもたちが巣立っていき、移り住んだころの幼い姿などを「不在の在」として想い見るほどのスペース（「エンプティ・ネスト」。空になった巣）を、そっとしておくことができている（家庭も多いことだろう）。

Wさんの場合も、中年期に家計をぎりぎりまで工面して借入れをし、都市郊外に戸建住宅を購入して子どもを育てた。

子どもがそれぞれに自立した後は夫婦ふたりで暮らしているマイホームは、「二世代型住宅」と呼ぶことができる。父として母としての立場でそれぞれに内容は異なるだろうが、子育て期のいくつもの困難をなんとかクリアしてきた父と母としての感慨のスペースであるとともに、この狭い実家は、子どもたちとくに娘にとってはいそかな生活戦略にかかわるスペースでもある。

このところの傾向として、「三世代同居」は減り続けてきて、高齢者（ここは六〇歳以上）の四〇%が同居を望んでいるのに、実際に子・孫と同居している人はいまや二〇%ほどに。大泉逸郎さんの歌った「孫」が、桑田佳祐の「TSUNAMI」がトップという時代に、場違いといった感じでベステン入り（二〇〇〇年度の二〇位）したことがあったが、「孫」との同居の減少傾向はなお続

いており、願望はやはり歌の背景に遠のきつつある。

「古希期」あたりの高齢者の「マイホーム家族」のありようは、ここから分かれる。「わが家の三世代同居型」と「ひとり暮らし型」とである。後者の場合には、夫を失ったあと（逆も）にひとり暮らしを望むもの。

ここでは本稿が将来の「日本型標準家族」として想定する「三世代同居」家族のありようを追ってみよう。

孫はかぎりなくかわいい。傷みは目立つものの住み慣れた「二世代住宅」に暮らしている父と母は、子どもが巣立ったスペースを今度は孫のためにしつらえ直して、わが家三代目を養育する場を用意することになる。

「近居」ができている場合は、離れて暮らしている分だけそれぞれの独立とプライバシーは損なわれることはないが、離れている分だけ問題回避型の接触とならざるをえない。幼い孫はかわいいし、暮らしに張り合いをもたらししてくれる。そこで出会いを待ち、会うごとに何かと望みをかなえてやる、やさしいおじいちゃんとおばあち

やんになる。

だれもがきちっとした「孫育て」には限界があるのはわかっている、現状ではこのあたりが高齢者にとって標準的のしあわせ家族となっている。

「近居」がうまく機能しているみなさんのご家族のしあわせをここで祈りつつ、このところ減りつづけてきた「三世代同居住宅」の課題をみてみたい。三割ほどは残っていないと、この国に伝来の「わが家三代の暮らしの知恵」が途切れてしまうからだ。

いままさにその瀬戸ぎわの時期にある。「三世代同居」は仔細な「わが家三代の暮らしの知恵」を子子孫孫に伝えるには、どうしても必要な住環境だからである。

かつてのヨメ（嫁）の忍従によって成り立っていた農家型標準住宅ではなく、三世代がそれぞれのプライバシー空間を保持しながら、同等の意識で暮らしをとる家族住宅である。

「実家依存症」といわれても

*「女系家族」の支援で「文字型就業

娘が結婚して世帯を持ち、子どもが生まれる。「できちゃった婚」が並みの時代だから、結婚後一〇カ月のハネムーン・ベビーを待つよりも、結婚六カ月前後が最多とかで、案外すみやかに確実に「ノンプラン・ベビー（孫）」がやってくる。

二五歳までの並みの出産期をはずすと、あとは先延ばしして三〇歳代に。これでは少子化に歯止めをかけようがない。それでも三〇歳の大台に乗って、なんとか子どももと覚悟はきめたものの、夫婦の不安定なしごとでは養育・教育費は家計の重圧になるのは先方に見えている。公立でも約一〇〇〇万円、私立だと約二二〇〇万円になるといって、就学前の時期のたいへんさを聞き、マスコミを賑わす子どもたちにかかわる事件を目の当たりにして、不安はつのるばかり。そこで、「ケアさん力を借し

て」ということになる。

子育てに母親の助力を期待しすぎると、「実家依存症」といわれかねない。国をはじめ、夫婦ふたりによる子育てを「新エンゼル・プラン」以来の目標とし推奨している自治体や、若いカップルを対象にして子どもものしつけを教えるしごとをしている専門職側からは、祖父母の育児参加は歓迎されていないのである。

驚いたことには「次世代育成」の現場では「祖父母」という文言は公的文書のどこにも示されていない。これではわが家三代の暮らしの知恵は、祖父母の立場で子・孫に伝えようがないのである。

「実家依存症」といわれても子育てに母親の助力（家族の含み資産）を期待して両親と同居して暮らすことを考える娘夫婦がいる。

かつてシュウトメにわずらわされないよう専業主婦を求めた母世代の「核家族」指向から、M字型就業を避けて太一文字型の専業課長でありたい娘世代による「三世

代同居」へのUターンである。ここは女系の母娘とするが、それでも三割強は十分に確保できる。

「三世代同居型」住宅をつくる

*暮らしの知恵を孫に伝える

大都市近郊に住むWさん夫妻は、近居して子育て中の娘家族の要望もあつて、建て替えを覚悟して「世帯同居」型の住居を建築することになっている。

メーカーを通じて調べてみると、事例は決して少なくはない。各メーカーともユーザー側のさまざまな要望に対応できるノウハウを持っており、住宅内のバリアフリー化はすみずみまで意識されている。

部屋の配置はもちろん、つまづいて転倒しないよう段差をなくしたり、手すりを設けたり、階段の勾配を緩くしたり、車イス（訪問客もある）を考慮して幅広廊下にしたたり、少ない動作で開閉できる引き戸を多くしたり・

などが実現されている。「家族とともに成長する住まい」を提案しているメーカーもある。

すでに建て替えて「三世代同居住宅」に住んでいるお宅を実際に訪問する機会を提供しているメーカーもある。

そこで、Wさんは参加してみた。大手メーカーによる広域造成地での建て替え住居だから外形も安定しており、年月を重ねて街並みに落ち着きを与えていることがわかる。かなり大ぶりのサクラが庭の隅にあつて、それを囲むようにL字型の二階家が建っている。

「ここを選んだ家内の母が子どもの成長とともに大事にしてきた樹でしてね」

Wさんの庭への視線を察して、ご主人がいう。夫妻のほかは高校生の娘と義母の四大家族。一階は母親の部屋と共用のスペース、二階に夫妻と娘の部屋と広いリビング。一角に書斎もあつて、「マスオさん」として「三世代同居」を成立させながら、マスオさんよりはずっと存在感があるように見受けられた。

上下階の雰囲気違和を感じさせなかったのは、母と娘の間に暮らし方の一貫性が保たれているからだろう。

「三世代同居型住宅」として申し分ないが、それでも義母の方の遠慮がちな気配が構造やモノに表われているのが気になったという。

「長寿社会対応住宅」として「長寿社会対応住宅設計指針」（一九九五年、建設省）が出て二〇年近くになる。住宅産業は、メーカーの配慮くらべて高齢化対応がもっとも進んでいる業界である。住宅メーカーによって取り組み方は異なるが、どこも「世帯住宅」のノウハウを十分に蓄積している。

そこまでは結構なのだが、せっかくの世帯同居型住宅にもかかわらず、どのメーカーの小冊子のモデル設計を見ても、まだまだ共用スペースのつくりつけがミドル（＋ジュニア）主体に寄りがちになっている。「三世代型住宅」とは称しているものの、「離れた和室ひと部屋への高齢世帯の引きこもり」が推測できるものが多くみられるのが

実情なのである。

これではほんとうの高齢化対応の三世代住宅とはいえない。「人生の第三期」の主役として、これから二〇年もの長い高齢期をゆつたりと暮らす家ではない、とWさんは気づいている。

ここはわが妻であり子の母であり孫たちの祖母である高齢女性の出番である。孫の成長に接しながらわが家の「暮らしの知恵」を伝えられる場としての共有スペースはもちろん、「三世代のプライベート・スペース」と生活動線を等しく織り込んだ住居を目標にして、メーカーの技術者と設計にはいつている。

いま三世代が揃っているいなかかわらず、三世代が等しく扱われる同居住宅が「三世代同等同居型住宅」長ければ「三同同居住宅」とでも呼んでくださいである。「家族みんなで考えていろいろ解決することができまから」と、Wさんはライフ・スタイルが異なる家族三代がいくつすさまじき場面での処理に期待をこめていう。

「三同同居宅」を実現できるW家はしあわせ家族である。すべてのご家庭にできるわけではない恵まれたケースではあるが、多くあっていいケースなのである。

「三世代同同居型住宅」は、企業側がすすめるすぐれた女性社員の地元勤務型キャリアの設置とともに、子育て期の女性が男子社員と伍して能力を十分に発揮できるように支援する上で歓迎すべきものとなる。これまで女性社員の六割におよぶ結婚時の「寿退社」とその後のアルバイトというM字型就業を意識せずに、入社時から高年齢まで一文字型にしごとに集中できる女性人材として処遇できるからである。

そして何より孫世代にわが家の「暮らしの知恵」を暮らしの中で伝える「母娘同居」という母系のつながりを有効に活かすことになる。母と娘がやりとりする継続性のある生活感、祖父母と接することによってもたらされる孫世代へのメリットには計り知れないものがある。

「うちのジージがね」といって自慢するジュニアが三分

の一ほどこないと、この国の先人が残してくれた「暮らしの知恵」が次世代に伝わらなくなってしまう。国の骨格がもろくなってしまうのである。

同居しながら高齢者をたいせつにするジュニアを育てる機会をもつ家族。これもまた「高齢社会」を構築するために重要な「三つのステージ化」の一環なのである。